

平安貴族社会における上臈女房の再編

野田有紀子

はじめに

日本古代における男性貴族社会の身分階層は、律令国家では位階で序列され、唐制に準じて三位以上を「貴」、四・五位を「通貴」とし、蔭位制をはじめとする様々な律令官人としての特典が与えられた。これが平安中期になると位階よりも天皇個人との関係が重視されるようになり九世紀末に昇殿制が成立すると、男性貴族は公卿・殿上人・諸大夫といった身分階層により把握された。さらに一〇世紀末以降、家格の概念が形成されていき、院政期に細分化・固定化するにともない、官途や極位極官などが家格によって定まるようになった。⁽²⁾

さて、筆者はこれまで行列・書状などを題材として平安貴族社会における女性、なかでも后宮などに仕えた女房集団の身分秩序や階層意識について検討を重ねてきた。⁽³⁾ その結果、一条朝後半の藤原道長政権下から院政期にかけて女房階層が大きく再編され、そこには先述したような男性貴族社会の階層再編過程と密接な関係が認められる。そこで本稿では、これまでの成果をもとに、女房集団のうち最上層「上臈女房」の再編過程を、男性貴族社会の身分階層との関連性に主眼を置いて整理することとする。まず第一章で一条朝前半における上臈女房の状況を確認した上で、第

二章で道長政権下に着手された上臈女房の再編過程について、第三章では院政期にいたる再編過程と平安末期時点での到達点について考察する。最後にそうした再編が中臈以下の女房に及ぼした影響にも言及したい。

一 一条朝前半における上臈女房の状況

平安中期、天皇や后宮などに仕える女房集団は、「年ごろの女房たち、上中下のほどなどの」（『栄花物語』巻一〇、長和元年へ一〇一二）二月一四日の三条天皇中宮藤原妍子立后記事）と見えるように、おおよそ上臈・中臈・下臈の各階層から構成されていた。家格による身分秩序が細分化・固定化した後世の史料ではあるが、順德天皇『禁秘抄』（承久三年、一二二二）女房に、「上臈、不謂是非、二三位典侍号上臈。着赤青色、候御陪膳也。不補是等職聴色、大臣女或大臣孫也。孫猶或不聴或聴之（後略）」「小上臈、不謂善惡、公卿女号小上臈、着織物并表着也。侍臣（殿上人）女依議。公達女勿論。諸大夫公卿孫、或為小上臈、或為中臈也。可依父官歟（後略）」「中臈、内侍（掌侍）外不着織物類也。是昔号命婦。侍臣女已下也。諸大夫良家子、医・陰陽道等猶号中臈。八幡別当女同（後略）」「下臈、諸侍・賀茂・日吉社司等女也（後略）」等とあって、典侍・掌侍など役付を除けば、大臣・公卿・殿上人・諸大夫といった男性貴族社会の身分階層に連動する形で、父および祖父の身分・地位・家格を基準として女房集団での階層が定められた。このうち最上層の上臈女房（小上臈含む）には、典侍のほか、大臣女および孫女、公卿女、殿上人女の一部、公達（特定の高貴な家柄の子弟）女、諸大夫公卿孫女の一部を充てるとされ、平安中期の後宮女房もおおむねこうした例であった。

后宮や女御に奉仕する女房は、后妃の父などによって、まず入内の供として所定員数を備え、さらに入内後も必要に応じて追加された。女房の採用条件として、早くは『うつほ物語』（円融朝―一条朝初期成立）あて宮に、左大将

の娘「あて宮」の東宮参入準備として、「御供人、大人四十人、みな四位、宰相の娘、髪丈にあまり、丈よきほどに、手書き、歌詠み、琴（弦楽器の総称）、琴弾き、人のいらへ（受け答え）すること、みな上手、歳二十余のうち」のごとく、父の身分に加え、本人の器量・教養・年齢を考慮して選び集めたとある。正暦五年（九九四）二月、関白藤原道隆は娘の一条天皇中宮定子に仕える女房たちを見渡して、「一人わるきかたちなしや。これみな家々のむすめどもぞかし。あはれなり。ようかへりみてこそ、候はせたまはめ」（『枕草子』二六〇段。以下ことわらない限り新編日本古典文学全集〈三巻本〉に拠る）のごとく、器量に加え家柄にも考慮し厳選した女房であり、十分に目を掛けて仕えさせるのが宜しいと述べる。

父道隆の言葉どおり、中宮定子は女房にさまざまな心配りを欠かさなかったが、なかでも公卿女には篤く配慮した。「上達部などの、またはじめてまゐらむと申さする人のむすめ（初めて宮仕えに出ようと申し入れている公卿女）」には「仰せ書き」が届けられる例で、「心ことに紙よりはじめて、つくろはせたまへる（定子自らとくに気を遣って料紙などを整えたもの）」であり、受領層出身の清少納言らは冗談で悔しがっている（一五二段）。

出仕後も上臈女房は特権的な職務や待遇を与えられた。「上臈御まかなひに候ひたまひけるまゝに、近うゐたまへり」のごとく中宮定子の身の回りの世話をし、側近くに伺候する（一七七段）。正暦五年の積善寺行啓での見物の際も、上臈女房である中納言（右大臣藤原師輔孫）と宰相（右大臣藤原顕忠孫）二人は中宮定子と同じ長押の上に、中臈以下の女房は長押の下に、それぞれ座して見物した（二六〇段）。

また長徳元年（九九五）、東宮（居貞親王、のち三条天皇）に入内した淑景舍女御藤原原子が姉定子のもとを訪問した際、御簾の外側にいた清少納言が、「織物の唐衣どもこぼれ出でて、相尹（師輔孫）の馬頭のむすめ少将の君、北野の三位（藤原遠度。師輔男）のむすめ宰相の君などぞ近くはある」と、御簾から溢れ出ている織物の唐衣の様子から、原子付の女房のうち少将や宰相が伺候しているとしており（能因本『枕草子』一〇八段）、上臈女房に装束上の特権が与えられていたことが分かる。

以上のように上臈女房は、一〇世紀末には特権的な職務や待遇を付与されていた。しかしながら当時の貴族社会では、女房出仕は敬遠される傾向にあり、「いはゆる女房といふものは、家司・諸大夫の子女といふことにきまつてゐたといつてもよかつた」^⑦。そうした受領層ですら、『枕草子』は「宮仕へする人を、あはあはしうわるき事（輕薄でよくない事）に言ひ思ひたる男などこそ、いとにくけれ」（二二段）と記し、『紫式部日記』も出仕した自分を友人が「いかにおもなく心浅きものと思ひおとすらむ（不名誉で浅はかだと輕蔑しているだろう）」と恥じている。ましてや公卿女の女房出仕に対する忌避感^⑧は極めて強かつた。『禁秘抄』に「上臈（中略）上古可^レ然人女皆爲^二女御・更衣」と記されるごとく、上級貴族の娘は宮中^⑨には女房として出仕するのではなく、女御・更衣として入内するのが従来の例であつた。『小右記』長和二年七月一二日条に「近代太政大臣及大納言已下息女、父薨後、皆以^レ宦仕、世以^レ爲^レ嗟。但父未^レ死之前宦仕、参議正光女外未^レ聞之事也」と嘆かれているように、以前は大臣・大納言など高位公卿女の出仕例は稀で、最末席の参議女ですら父没後にほぼ限られていたという。中宮定子が公卿女に書状を遣わして丁寧に招いたのも、こうした事情を考慮したからであろう。

それゆゑ参議女の女房出仕は、しばしば零落の象徴として語られた。『源氏物語』蛸に登場する玉鬘付きの女房「宰相の君」は、参議であつた父（玉鬘の母夕顔のおじ）没後に零落して「世に衰へ残りたる」を、源氏が探し出して仕えさせたとする。三条朝の妍子立后以前にも、織物の唐衣が許されるほど身分は高いが「何ごととも心苦しげに、うちうちなづましげなりつる人（何事につけ気の毒な、物事がうまく運ばない女房）」がおり、そのひとり「大宰相の君」も「おばおとど（御婆大殿）」とあだ名され侮られていた（『栄花物語』巻一〇）。当時、公卿女でありながら出仕する上臈女房のなかには、父が故人などで経済的・社会的に後盾が乏しく、豪華な衣装を用意できないなど女房集団内で不利な立場であつた者も少なくなつたのだらう。

そして一条朝前半にあつては、上臈女房に与えられていた特権は、女房集団内でそれほど絶対的で強固なものではなかつた。中宮定子の積善寺行啓においては、上臈女房の中納言と宰相が伺候していた長押の上の座に、定子の意向

によつて清少納言も召し入れられ、長押の下と同僚女房たちから「殿上ゆるさる内舎人なめり」と笑われたという（『枕草子』二六〇段）。内舎人とは令制では上級貴族子息が務める天皇近侍の官であつたが、一〇世紀には卑官化して諸家の侍が任じられ摂関などに賜る隨身となつていた。つまり、受領層出身の中臈以下女房である清少納言は、本来は卑官たる内舎人のごとく「地下」の座に候すべきであつたが、主人定子の意向があれば、大臣孫の上臈女房が伺候する「殿上」の座へと、容易に変更しえたのである。

また、中宮定子の身の回りの世話をし側近くに座るのは上臈女房であつたが、清少納言をはじめとする中臈以下も定子御前に参集し、同僚同士で会話、もしくは定子が女房に言葉をかけるのが日常風景だつた（二五九段）。有名な「香炉峰の雪」エピソードは、女房たちが「物語などしてあつまりさぶらふ」とき、定子が『白氏文集』の漢詩句を踏まえて問い、清少納言がそれに応じて御簾を高く巻き上げたものである（二八〇段）。

なお、中宮定子が里第二条宮に退出した夜、清少納言は女房用の車が無くなつたので、下級女官の得選を乗せる車で戻つた（二六〇段）。こうした非公式行啓の場合は、乗る女房も差配役の中宮職も乗車座次にそれほどこだわりを見せていない。

すなわち後世とくらべると一条朝前半の女房集団は、上臈と中臈以下、および中臈以下と下級女官との間で、待遇面などの格差がそれほど絶対的なものではなく、厳格には意識されていなかったと考えられる。⁹⁾上臈女房としての待遇は保証されず、特権的地位として確立していなかつたと言えるだろう。

二 道長政権下における上臈女房の再編過程

(1) 上臈女房としての出仕要請

藤原道長は長徳元年（九九五）内覧として政権を掌握したのち、娘たちを次々と入内させ、その供として所定員数の女房を揃えた。長保元年（九九九）長女彰子が一条天皇に女御として入内した際には、容姿や人柄はもちろん、四位・五位（諸大夫）の娘でも気品があり育ちの良い者四十名が厳選された。寛弘七年（一〇一〇）次女妍子の東宮（居貞親王）参入時に備えられた女房四十名は「年ごろの人の妻子（長年、道長家に仕えてきた者の妻や娘）」が中心であった（『栄花物語』巻六・八）。

こうした従来通りの女房採用に加え、道長はさらに摂関・大臣を含む上級貴族の娘までも上臈女房として迎え入れようとした。道長の意を受けた妻源倫子や娘たちから出仕を促す書状や使者がさかんに遣わされ、寛弘七年准大臣藤原伊周の薨去後、中の君（周子）には中宮彰子から度重なる書状が届けられ、「帥殿の御方」として出仕することになった（巻八・一四）。非参議右兵衛督源憲定女（為平親王孫女）の場合は、皇太后彰子からしきりに使者を遣わして出仕要請している（『小右記』長和二年（一〇一三）七月二二日条）。故太政大臣藤原為光四女は、寵愛を受けていた花山院崩御後、道長の意向を受けた妻倫子が何度も書状を送り、「姫君の御具（お相手役）」として迎えたという（『栄花物語』巻八）。関白藤原道兼の遺女は、後一条天皇に入内した尚侍威子（道長三女）やその母倫子から熱心に書状で請われ、「二条殿の御方」として出仕した（巻一四）。

このほか長和二年、三条天皇中宮妍子が禎子内親王出産後に内裏参入する際、故為光五女（穠子か）や故関白藤原道隆女のほか、存命公卿である参議藤原正光（関白兼通男）女で源高明（醍醐皇子）孫女にあたる光子など「さべき人の女など」が女房として数多く奉仕した。この頃には「しかるべき身分の妻や娘はみな出仕してしまい、家に籠っ

ているのは欠点があるか体に支障があるのだろう」と言われるほどであった（巻一一）。源明子腹の娘寛子と小一条院との婚儀（寛仁元年、一〇一七）では、しかるべき女房は道長家の后宮などに集めてしまに残っていないのではと懸念されたが、それでも大納言藤原道頼（関白道隆男）女「大納言の君」をはじめ、宮家女や公卿女など恥ずかしくない女房が大勢揃えられた（巻一三）。

このように道長が娘たちの女房として上級貴族の娘を相次いで迎え入れた背景には、道長の絶対的政治権力の獲得と、それにもなう道長家を頂点とする家格の成立が存在する。男性貴族社会と同様、女性貴族のなかにも道長家の娘を頂点とする家格秩序を現出しようとしたのである。初めのうちは公卿女の出仕例もまだ多くはなく、父没後や妾腹など特別な事情や不利な条件がある場合に限られていた。道長家が他家とは別格の存在であることが決定的になるにつれて、父が存命で特に不利な条件のない公卿女や、さらには摂関・大臣女や親王孫女のような高貴な姫君にまで出仕要請するようになった。

しかしながら一一世紀初頭以前は受領層ですら女房出仕は忌避される傾向にあり、参議女の女房出仕は零落の象徴として見なされた。ましてや后がねとして入内を目して育てられた、摂関・大臣など上級貴族の娘が出仕することは、当時の貴族社会において前代未聞の極めて不名誉な所行であった。伊周は臨終の際、「今の世のことで、いみじき帝の御女や、太政大臣の女といへど、みな宮仕に出で立ちぬめり」の有様であるので、自分亡き後、娘たちを女房として欲しがる人も多いだろうが、そうした不面目なふるまいは決してあってはならない、と固く言い遺こした（巻八）。しかし薨去後、中の君（周子）が中宮彰子女房として出仕することになり、「帥殿の姫君の御参り、あはれなることぞかし。（中略）『昨日の淵、今日の瀬になる』といふこと、まことに見えたり」のごとく、思いも寄らぬ哀れな運命として描かれている（巻二四）。藤原実資は源憲定女（為平親王孫）のような尊貴な血筋の女子まで出仕要請されるような近年の風潮に対し、「近代太政大臣及大納言已下息女、父薨後、皆以宦仕、世以為嗟。（中略）末代卿相女子為『先祖』可レ遺レ恥」と嘆いた（『小右記』長和二年七月一二日条）。また三条天皇中宮妍子のもとに故為光五女をは

じめとする高貴な姫君たちが出仕したことは、「さてもあさましき世なりや。太政大臣の御女もかく出でまじらひたまふ、いみじきことなり」と慨嘆をもつて記されている（『栄花物語』巻一一）。

寛仁二年、関白道兼遺女（二条殿の御方）が後一条天皇尚侍威子の女房として出仕要請された際、本人・母北の方・兄兼隆やその場に控える女房たちが涙に暮れ嘆いた。しかし当時の政治情勢では、道長側からの出仕要請を拒絶することは極めて困難であり、兄兼隆は「もし道長からの要請を断つたりしたら自分にとつて都合の悪いことになるう」と涙ながら答えている（巻一四）。また源憲定から娘の出仕要請について相談された源俊賢は、「宜しいことではないが出仕を要請されたからには従うべき」と答え、実資は「所憚」があるため是非を答えず、ただ源氏長者たる俊賢の指示に従うよう伝えたが、内心では「雖不_二貢獻_一、可_レ無_二重譴_一、歟、縦雖_レ有_二重科_一、有_二何事_一乎。（出仕させなくても重譴を受けることはないだろうし、たとえ重科に問われようと構わないではないか）」と憤慨している（『小右記』長和二年七月一二日条）。しかし実際、万寿四年（一一二七）禎子内親王の東宮（敦良親王、のち後朱雀天皇）入内に際し、源実基が姉妹（故権中納言源経房女）への女房出仕要請を断つたところ、道長から出入禁止を仰せられ、実基が謝罪する始末となっている（『栄花物語』巻二八）。絶対的政治権力を掌握した道長からの出仕要請は半強制的なものであり、他家の貴族たちはみな従うよりほかに方法はなかったのである。

上級貴族の娘の女房出仕は非常に不名誉で忌避すべき行為とされ、本人や家族・親族から大きな抵抗をともなった。そのため道長側も十分な配慮が不可欠であり、妻倫子から道兼女に送った出仕要請状の文面には、「何かと思すべきにあらず、つれづれの慰めに語らひ聞こえせん（何かとご心配なさるようなものではなく、娘の所在なさを紛らわすお相手として御迎えしたいのです）」との旨が記されていた。初出仕には道長側から必要品があげさなぐらい届けられ、道長の車まで迎えに寄越すなど、格段の配慮が認められる（巻一四）。出仕後も特別な配慮は続き、「取り次ぎ」など女房の従来の職務も強要されず、伊周女「帥殿の御方」は大変重んぜられながら宮仕えし（『大鏡』道隆）、道兼女「二条殿の御方」も道長子息でさえ容易く近づかせぬほど高貴な存在として篤くもてなされたという（『栄花物語』

卷一四。

ただし、こうした上臈女房もあくまで女房集団の一員であったため、職務分担および待遇をめぐる女房集団に軋轢を生じさせた。「取り次ぎ」の職務に関して紫式部は、「中宮彰子に仕える」上臈女房はあまりにも弱々しく子どもっぽい様子で、中宮大夫藤原齊信が参上しても応対することはめったになく、応対に出ても恥ずかしさのあまり満足に受け答えが出来ず、ひたすら姫君のままの振る舞いでいる」と指弾する（『紫式部日記』消息文）。取り次ぎを依頼に訪れた男性貴族からも職務態度に対する不満の声があり、女房集団の内部秩序も動揺することになった。

(2) 女房集団における階層格差の明確化

道長は摂関・大臣を含む高貴な姫君に対して半強制的に出仕要請する以前、女房集団における上臈と中臈以下との階層格差の明確化にも着手していた。

『禁秘抄』には「小上臈、不_レ謂_二善悪_一、公卿女号_二小上臈_一、着_二織物并表着_一也（中略）中臈、内侍外不_レ着_二織物類_一也」のごとく、織物の唐衣は上臈女房には聴されるが、内侍（掌侍）を除く中臈女房には聴されないとする。しかし道長長女彰子が長保元年に十二歳で一条天皇の女御として入内した時は、諸大夫層出身を含む女房が一緒に「同じき大海の摺裳、織物の唐衣など」を着用していたという。これが翌二年、彰子が立后し中宮として初参内する際には、女房の装束が身分に従って明確に区別されることとなり、織物の唐衣は聴された身分の女房のみが着用して文様が鮮やかに浮き出て立派に見えた一方、そうでない身分の女房は許される範囲で趣向を凝らした無文の唐衣などを着用しているものの、見栄えがせず本当に残念な感じであった（『栄花物語』卷二）。

次女妍子は寛弘元年尚侍に任じ、同七年に東宮（居貞親王）へ参入した際、長年道長家に奉仕してきた者の妻や娘など女房が、すばらしい織物の唐衣を着用し豪勢な大海の摺裳を一同腰にまとって集っていた（卷八）。これが三条

天皇即位後、同九年に妍子が中宮として立后した際には、女房の装束が身分に従って厳しく区別される。それまで身分は高いが経済的・社会的に後ろ盾が乏しく豪華な衣装を着られなかった上臈女房が規則通りに織物の唐衣を着用し、「おぼおと」とあだ名され侮られていた「大宰相の君」もこの日はすばらしい葡萄染の織物の唐衣を着用して晴れがましく伺候していた。逆に、道長家に長く奉仕してきた「年ごろの女房たち（古参女房）」は受領層出身などで経済的に豊かで、これまで「上中下のほどなどの、わきがたう思ひ思ひなりつるほど（上臈・中臈・下臈という身分の区別ができないほど、思い思いに着飾って）」「したり顔なりつる（得意顔で）」「われはと思ひたりつる（自分こそはと思いがついていた）」が、今回は織物でなく平絹の唐衣を着ることになり、目立たなくなってしまうて不満そうであった。『榮花物語』は、「品々わきたまへる（それぞれの身分をはつきりさせた）」ほどなど、げに公とならせたまひぬるは、ことなるわざなりけり」のごとく、妍子が立后して「公人」となったことで、女房階層間の格差も当然明確化されたのだとする（巻一〇）。

先に挙げた彰子の場合も、立后後に「公人」とされたことを契機として、男性貴族社会と同様、女房集団においても道長家を頂点とする家格秩序に従った序列化、身分階層の明確化が図られたためと考えられる。上臈と中臈以下の階層格差が、織物の唐衣の着用可否によって明確に可視化されたことは、彰子女房集団だけでなく、貴族社会全体にも周知されたであろう。寛弘七年に伊周女が中宮彰子のもとに上臈女房「帥殿の御方」として出仕するが、その時点までに上臈と中臈以下との階層格差が明確化され、上臈女房のみの特権的な待遇が保証されるなど、上級貴族層がなるべく抵抗なく娘を送り出せる職場環境が整え始められていた。

ただし妍子立后にあたり、織物の唐衣を制限された中臈以下的心中には強い不満や反発の気持ちが燦り続いていたという。また寛弘九年の三条天皇御禊幸で、出車の後方座次へ下げられた妍子女房が憤慨し、わざと後ろの簾を下ろしたまま渡った際、世間は「男はえしかあるまじくこそはべれ（男性だったとしてもそんなことはできない）」と非難した（『大鏡』雑々物語・道長）。男性官人であつたら到底許されないであろう主人への当てつけ行為が女房の場

合は許容されているのであり、男性貴族社会の身分秩序が当時はまだ女房集団に充分浸透していなかったことを示唆するものと言えよう。女房階層の厳格化は一時では達成されず、過渡期の状態を経て、院政期にかけて徐々に浸透が図られていくのである。

(3) 女房出仕に対する意識転換

従来、貴族社会では女房出仕に対する忌避感が強く、しかるべき女房を揃えるのも容易でなかったが、一一世紀前半に女房出仕への抵抗感がしだいに薄れ、公卿層から諸大夫層まで競って出仕するものへと大きく意識が転換する。

道長政権下、摂関・大臣など高位公卿の娘が相次いで出仕させられ、当初は前代未聞の不名誉な所行として大きな抵抗をともなったが、高貴な姫君にふさわしい待遇で篤くもてなされ、中臈以下との階層格差が明確化されたことで、公卿層において女房出仕に対する抵抗感が軽減していったと考えられる。道長は万寿四年に薨ずるが、その頃には上級貴族層の間でも道長の娘や孫へ女房出仕を希望する者が跡を絶たなくなっていた。その年、禎子内親王の東宮（敦良親王）参入時には、「参らん参らんと案内申しつる人々」が相次いだため一部のみ採用し、上臈女房でさえ禎子内親王に気に入られないのも気の毒なので採用を見送った者がいたほどであった（『栄花物語』巻二八）。永承五年（二〇五〇）関白藤原頼通女寛子が後冷泉天皇の女御として入内する際は、大切に育てられた名家の娘が競い合うように出仕した。「殿のかく御心に入れさせたまへると思ふべかめれば（関白頼通が力を入れているようなので）」、傳かれて育てられた相当な家の子女で出仕しない者はいなかった。故大納言藤原齐信女や、源実基（醍醐源氏高明孫）女・源経隆（宇多源氏重信孫）女といった公達女が大勢出仕したため、「諸大夫の女などは数へ尽くすべくもあらず」であったという（巻三八）。女房採用の重心が、従来の諸大夫女から、公卿女や公達女へと移行しているのである。

この期間には、諸大夫層でも女房出仕に対する意識が大きく転換した。長暦三年（二〇三九）菅原孝標女は祐子内

親王（後朱雀皇女、母は頼通養女姫子）家の古参女房から出仕を促されたが、昔氣質の親は宮仕えを「いと憂きこと（大変つらいこと）」だと放置しており、周囲の人々からの「今の世の人は、さのみこそは出でたて（誰もが進んで出仕したがるものだ）。さてもおのづからよきためしもあり（幸せを掴める例もある）。さてもこころみよ」との声に押しされしじぶ娘を出仕させたという（『更級日記』）。父孝標は当時六十七歳、その若い頃（一一世紀初頭）には受領女であつても女房出仕は敬遠すべきものであつたが、地方赴任や「世にも出で交らはず、かげに隠れたらむやうにてゐたる（人付き合ひもせず隠居状態）」な生活を送るうちに、貴族社会ではすっかり意識転換が進んでいたのであろう。道長が絶対的な政治権力を完全に掌握したのち、道長家を頂点とする家格秩序が浸透し、女性貴族も徐々に組み入れられていった。その結果、男性貴族と同様、女性貴族も道長家出身の后宫に女房として奉仕し、道長家との関係を維持強化することが重要視されるようになった。このことが公卿層から諸大夫層にいたるまで、女房出仕に対する意識が大きく転換した主な要因だと考えられる。

三 院政期にいたる上臈女房の再編過程

（一）後三条・白河朝の女房出仕要請

道長主導で推進された女房集団の再編は、後三条・白河両天皇の強い意向によつて、さらに対象範囲が拡大された。延久三年（一〇七一）後三条天皇は寵愛する女御源基子が生んだ皇子（実仁親王）の乳母として「やむごとなからん人をがな」と願い、少納言藤原実宗（実資玄孫）妻や遠江守藤原家範（隆家曾孫）妻といった「公達の妻」を召し出したが、こうしたことは前代未聞であつたという（『栄花物語』卷三八）。かつて道長子女所生皇子の乳母は道長

家司の妻などから採用され、乗車順や装束は上臈女房並みの待遇を与えられた。ただし道長子弟の愛人候補とされるなど軽んじられた扱いを受けかねない立場であり、公達が妻を乳母として出仕させることは大いに面目を損なうものであった。道長は外孫敦成親王（のち後一条天皇）の乳母として、丹波中将源雅通（妻倫子甥）の妻を無理やり召し出そうとしたが、雅通は子を全員離縁して抵抗したため、乳母として参上することはなくなった。道長ですら遂行が阻まれたことを後三条天皇が成し遂げたというのである。

つづく白河天皇は、承暦二年（一〇七八）愛娘の斎宮姫子内親王御禊に際し、女房二十名として、しかるべき身分で親から大切にされている娘を召し出した。ひどく嫌がつてさまざまに支障を申ししたが、親を責め立てたので全員参上することになり、幕を引いてお互い見えないようにしたという。源信宗中将女（小一条院敦明親王孫）、摂津守藤原師家女（隆家曾孫）など「公達の親ある」をみな召し出したため、「諸大夫などのは言ふべきにもあらず」な状態であった（巻三九）。

女御源基子は後三条天皇の寵妃で、所生の実仁親王はのち東宮に立てられる。また斎宮姫子内親王は白河天皇の「第一最愛之女」で、准母立後の例を開き、「天下威権只在此人」（『中右記』永長元年へ一〇九六八月七日条）とまで評された。それぞれ天皇個人のとくに強い意向によって、愛児に高貴な女性を奉仕させようとしたものである。かつて絶対的政治権力を掌握した道長は、摂関・大臣・公卿の子女を上臈女房として半強制的に召し出すことで、道長家を頂点とする家格秩序を女房集団内部にまで浸透させようとした。後三条および白河天皇のとくに強い個人的意向によって、愛児の乳母や女房として公達の妻や娘を召し出したことは、新たな権勢の担い手が登場したことを当時の貴族社会に強く印象づけるものであっただろう。

(2) 女房集団における階層格差の厳格化

上臈と中臈以下との待遇や職務に関する格差は、院政期にかけて厳格化が進み、平安末期までには徹底された。

上臈と中臈以下とは、控え場所が厳格に分離された。仁安三年(一一六八)健御前(藤原俊成女、定家同母姉)が上臈女房「中納言」として出仕した建春門院(平滋子、高倉天皇生母)御所では、上臈女房は女院の御座所に続く二間に控えるのに対し、中臈以下はそこに続く台盤所が控え場所とされた。その控え場所においても、「上臈は局を立て、几帳をさしき。中臈よりは局も立てず、几帳もさざりき」のように、上臈のみが局および几帳を用いた。また御所の帳内へは、「御所の引き物の内へ上臈ならで参らず、大和・三河・常陸やうの人々、申べき事などあれば、御縁・広廂に御簾引きかつきてぞ候ひし」のごとく上臈のみが参入を許され、中臈以下は伝えるべきことがあれば御縁や広廂で御簾を引きかぶり半身のみを挿し入れて伺候した。大和らは女房の名寄せに「近く候し人」として挙がる近習女房であったが、それでも主人と同じ空間から締め出され、職務上でも出入が制限されたのである(『たまきはる』)。

職務面の分担もより厳格となった。上臈は主人の側で、日常は身の回りの世話を勤める。寿永二年(一一八三)二十七歳で八条院(璋子内親王、鳥羽天皇皇女)に再出仕した健御前は、「翌朝より物まゐらせ、御持仏堂へ歸らせおはしませば、又たたみおき、御前にては貝おほひ、将棋さしなど遊び」、のちには「御服・御帳・御几帳などまでも」従事し、崩御の際は「宰相殿と二人、御衣たてまつらせ更へなど」した。

一方、主人と同じ空間から締め出された中臈以下は、もっぱらその空間外での職務を担った。健御前が十二歳で建春門院に初出仕した際、右衛門佐が車寄せまで出迎え、常陸が早く参上せよとの命を伝え、三河が紙燭を手を迎えに來ている。このあと建春門院御前で中納言を紹介したのは、上臈女房である異母姉京極であった。

すなわち院政期にかけて、后宮などの主人周辺は上臈女房のみが出入を許される空間とされ、中臈以下は締め出さ

れていた。男性貴族社会における「殿上」と「地下」の区別が、やや遅れて女房集団にも浸透し、平安末期までに徹底されたのである。

(3) 女房集団内部序列の厳格化

院政期には上臈から下臈にいたるまで、職務および待遇面での序列化が強く意識されるようになった。たとえば取り次ぎ業務に関して、建春門院御所では、「人々に会ふ人に中将殿・帥殿・卿殿。つぎの人に三河・大和・少納言・右衛門佐、後には三河はなし。関白殿・右大臣殿・左大将などに冷泉殿・宣旨殿など」のごとく、男性貴族の身分に応じ、応対する女房の身分も三階層に分かれている(『たまきはる』)。

また、出車への乗車順や儀式での打出配置に関しても、院政期には上臈から下臈まで身分順に割り振りされ、そこに豪華な出衣や打出が組織的・統一的に施された。出衣や打出は摂関期にも行われていたものの、院政期になつて一段と豪華に組織化・統一化し、しかも男性貴族の日記にも詳述され始める。院政期になると男性貴族社会における家格が一段と細分化・固定化し、それが女房集団内部にも深く浸透し、行列や儀式の場において上臈から下臈に至る女房が序列に応じて差配された職務を果たすようになる。男性貴族もそうした出衣や打出を行列および儀式の場の正式な装飾だと認知し、女房を公的な役割を担う存在として位置づけたのである¹⁾。

さらに、上臈女房間の序列も徹底されるようになり、しかもその序列は主人の意向でも容易に変更できなくなった。健御前(中納言)は、建春門院の御幸で当初、大納言(藤原俊通女)と同車していたが、承安元年(一一七一)頃、大納言が中宮(平徳子)へ移った後は、内々の御幸では宰相(藤原親隆女)と同車することとなった。それを聞いた健御前の異母姉で同じく建春門院女房の京極は、父俊成の書状まで添えて建春門院に異議を申し立てた。建春門院は不機嫌となり、健御前自身も恐縮していたが、姉の京極はその後たびたび不満を漏らし納得しなかった。

かつて寛弘九年（一〇一二）三条天皇御禊行幸では、乗車座次を下げられ憤慨した中宮妍子女房が後ろの簾を下ろしたまま渡り、世間から「男はえしかあるまじくこそはべれ」と非難されたが（『大鏡』雑々物語・道長）、当時は男性貴族社会の身分秩序が充分浸透しておらず、女房の乗車座次は主人の意向によつて変更可能で、あくまでも主人と女房との間の問題とみなされた。それが院政期にかけて男性貴族社会の身分秩序が女房集団にも深く浸透し、女房出仕にあたって実家の親などが総掛かりで格式を整えて送り出し、儀式に際しても親が力を入れて装束を整えるようになっていたため、乗車席次も主人の意向や女房本人の意思だけでは決められず、実家の親や家族が家格に基づいて強く異議を唱えるようになった。

なお、より上級貴族出身者が上臈女房として相次いで出仕し、また家格の細分化・固定化にともない上臈女房のなかでの序列が嚴重に意識されるようになった結果、『禁秘抄』までに「上臈」と「小上臈」の別が生じ、のちには親王・摂関・大臣などの娘が「大上臈」とも称されるようになっていく（『女房の官しな事』一四世紀後半）。

以上のように後三条・白河朝から院政期にかけて、上級貴族層が上臈女房として出仕する範囲が拡大し人数も増加した。そうした女房集団に男性貴族社会の家格に基づく厳格な秩序が深く浸透したことで、上臈と中臈以下との職務や待遇面での格差が徹底され、女房集団内部の序列も強く意識されるようになった。摂関期に道長によつて着手された上臈女房の再編は、院政期にかけて徹底されていき、平安末期には一応の完成を見ることになるのである。

おわりに ― 中臈女房への影響 ―

本稿では、一条朝の道長政権下から院政期にいたる上臈女房の再編過程を整理し考察を加えてきたが、それは中臈以下の職務や待遇面にも多大な影響を及ぼした。一一世紀初頭までの貴族社会では女房出仕を忌避する傾向が強く、

おもに家司・受領など諸大夫層が出仕した。女房に求められた職務への適応力の面でも、文人家庭出身などで漢才に優れた者が多く適任であった。清少納言や紫式部はその漢才の発揮を期待されて中宮女房として召し加えられ、出仕後は男性貴族との取り次ぎ業務や書状・記録の執筆など、女房としての職務を円滑に遂行した^⑫。さらに主人周辺や女房集團の動向を日常的に観察し、『枕草子』『紫式部日記』として伝え残した。

しかしながら政権を掌握した道長によって、摂関・大臣をも含めた上級貴族の娘が半強制的に相次いで召し出されると、しだいに女房出仕への忌避感が薄れ、出仕希望者も増加する。『榮花物語』に「諸大夫の女などは数へ尽くすべくもあらず」「諸大夫などのは言ふべきにもあらず」と繰り返されるように、女房採用の重心が中臈以下から上臈へと移行し、中臈以下は主人と同じ空間から排除され、上臈とも伺候場所や職務空間が分離されることになった。

清少納言が豊かな漢才を発揮した逸話として名高い「香炉峰の雪」は、中宮定子のお尋ねに応じてその場に伺候していた清少納言が御簾を掲げたものであるが、院政期になると中臈以下は主人と同空間から排除されていき、言上の際も御簾に半身しか挿し入れられなくなった。また紫式部は少将（左大臣源雅通孫、倫子姪）をはじめとする上臈女房とも親しく交流し、『紫式部日記』に人物評を列記するが、院政期には上臈と中臈以下とは伺候場所や職務空間が嚴重に分離されたため、階層を超えた交流の機会が少なからず制限されたことが予想される。その結果、后宮など主人周辺や女房集團内部の貴重な情報を伝え残す担い手が、『枕草子』『紫式部日記』作者のような受領層出身の中臈以下女房から、『たまきはる』作者のごとき上臈女房へと移っていったのではないだろうか。

註

- (1) 古瀬奈津子「昇殿制の成立」（『日本古代王権と儀式』吉川弘文館、一九九八年。初出は一九八七年）。
- (2) 橋本義彦『平安貴族』（平凡社、一九八六年）、玉井力「院政と貴族官人層の再編」（『平安時代の貴族と天皇』所収、岩波書店、二〇〇〇年。初出は一九八七年）。

- (3) 拙稿「行列空間における女性―出車を中心に―」（『古代文化』五六巻五号、二〇〇四年）、「平安貴族社会における女性の漢才評価と書状」（『お茶の水史学』六三号、二〇二〇年）、「平安貴族社会における女性の階層意識―女房集団秩序の不安定化と再構築―」（古瀬奈津子編『古代日本の政治と制度―律令制・史料・儀式―』同成社、二〇二一年）、「平安貴族社会における女房集団の変容と漢才の行方」（『大正大學研究紀要』一〇八輯、二〇二三年）。
- (4) 註(2)玉井論文によれば公達の範圍は、一〇世紀以降の摂関家や賜姓源氏の子孫。具体的には、藤原忠平以降の摂関家子孫、および宇多源氏以降の賜姓源氏を指した。

(5) 最上層たる上臈女房に、役付者のほか、大臣女および孫女、公卿女といった範圍の女性を充てる例は、いづころどのように成立したのかを簡単に検討したい。日本令では唐制を改編し、后妃や皇族女性を除く貴族女性のうち、自ら五位以上の位階を帯びる女性を内命婦、夫が五位以上の位階を有する妻を外命婦として規定した（職員令3中務省条義解）。大祀・大嘗・元日に着用する礼服は、内命婦は本位に拠るのに対して外命婦は夫に准じ、外命婦のうち蘇芳色を着用できるのは夫が三位以上の者に限られた（衣服令10内命婦条）。ただし実際には『続日本紀』養老四年（七二〇）四月庚戌条「制、三位已上妻・子、及四位・五位妻、並聴_レ服_二蘇芳_一也」のように、三位以上の官人の妻のほか子（娘）の着用も聴されていた。『日本後紀』弘仁六年（八一五）一〇月壬戌条でも「勅、親王・内親王・女御及三位已上嫡妻・子、並聴_レ著_二蘇芳色・象牙刀子_一」とする。ただし同勅には金銀装車への乗車を聴す範圍として、「内親王・孫王及女御已上、四位已上内命婦、四位參議已上嫡妻・子、大臣孫、並聴_レ乘_二金銀装車_一」のごとく、四位參議以上の娘とし、さらに大臣孫女も追加されている。參議は令外官で弘仁元年に再置されており、金銀装車の規定はこれを反映したものであろう。やがて『延喜式』（延長五年、九二七）段階になると、金銀装車および車馬從の染袴が許可される官人子孫の範圍が「參議以上・非參議三位嫡妻・女子、大臣孫、すなわち大臣女および孫女、公卿女に整理された（巻四一・彈正台式）。なお同式車馬從条では、「凡車馬從者、（中略）外命婦准_二夫從數_一」。左右大臣女九人・大納言八人・中納言七人・參議六人、一位八人・二位七人・三位六人・

四位五人・五位四人」のように、夫の従数に准じる外命婦とは別に、大臣・参議という議政官の娘と、一〇位の娘が、父の身分・位階に応じて明確に序列化されている。以上のような過程を経て一〇世紀前半までに、大臣女および孫女、公卿女が特権的地位を与えられるべき範囲として設定され、これが上臈女房の採用基準にもつながり、さらに家格の形成にともない公達女などが追加されたのではないだろうか。

(6) 能因本一〇八段「北野の三位」、三卷本一〇〇段「北野宰相」と分かれる。「北野の三位」は藤原遠度で、永延元年（九八七）従三位、同三年薨去、よってこの時点では故人。「北野宰相」は菅原輔正で、正暦三年（九九二）従三位、長徳二年（九九六）参議、寛弘六年（一〇〇九）薨去、この時点で存命。『小右記』長和二年（一〇一三）七月一二日条「近代太政大臣及大納言已下息女、父薨後、皆以宦仕、世以為_レ嗟。但父未_レ死之前宦仕、参議正光女外未_レ聞之事也」に従えば、ここで上臈女房として出仕しているのは能因本のごとく、父が故人である北野の三位（藤原遠度）女であることになるが、『小右記』が公達に限った例の可能性もあり未詳。

(7) 阿部秋生『源氏物語研究序説』第一篇第二章第二節・五・（五）女房（東京大学出版会、一九五九年）。

(8) 「おば」は老女、「おとど」は敬称だが、老女に対する軽侮の言葉（「おばほどの」の意）としても用いた。『源氏物語』葵・朝顔では、色好みで知られた老女源典侍を、光源氏と桐壺院が「おばおとど」とからかつて呼んでいる。

(9) 一〇世紀以前には、女性貴族間の身分階層は、男性貴族間と比べると全般的にそれほど厳格には意識されていなかったようである。『蜻蛉日記』では、受領女である藤原倫寧女が、摂関家御曹司兼家との結婚後、兼家同母妹の貞観殿尚侍登子（村上天皇後宮）や怱子（冷泉天皇女御）、兼家異母妹の愛宮（源高明室）、さらには兼家同母兄の太政大臣兼通など上級貴族と書状を交わしており、姻戚関係にあるとはいえ、身分階層を超えた交流が確認できる。

(10) 服藤早苗『平安朝 女性のライフサイクル』（吉川弘文館、一九九八年）、同『人物叢書 藤原彰子』（同、二〇一九年）。

(11) 註(3) 拙稿「行列空間における女性―出車を中心に―」。

- (12) 拙稿「紫式部の生育環境―受領・文人の娘として」(服藤早苗・東海林亜矢子編『紫式部を創った王朝人たち―家族、主・同僚、ライバル』所収、明石書店、二〇二三年)。